

## 創世記4 創世記1章14節～31節

### 「第4日目～第6日目」

#### イントロ：

1. 前回の復習：創造の6日間について
  - (1) 1章2節：「トーフー」とは、カオスのこと。
  - (2) 1章2節：「ボーフー」とは、虚しい状態のこと。
  - (3) 6日間の創造は、厳密には修復、再生のことである。
    - ①「トーフー」の修復が、第1日目から第3日目の業
    - ②「ボーフー」の修復が、第4日目から第6日目の業
  - (4) きょうは、第4日目から第6日目を取り上げる。
  
2. 第1日と第4日、第2日と第5日、第3日と第6日が対応している。
  
3. 7つのステップが基本的には踏襲されている。
  
4. きょうのメッセージは、私たちに何を教えているか。
  - (1) 日本は自殺大国
    - ①自殺者数は、2007年に33,093人。連続10年3万人以上（警察庁統計資料）
    - ②自殺率は、10万人に約24人。旧ソ連邦に匹敵。米国の2倍以上。
    - ③交通事故死。2006年に6,352人。10万人当たり4.97人。
    - ④3分の2以上が男性。
    - ⑤年齢と自殺者数とは正比例する。
  - (2) 自殺の原因（3大原因で84パーセントを占める）
    - ①健康問題 48%
    - ②経済・生活問題 24%
    - ③家庭問題 12%
  - (3) 旧ソ連邦の例：ストレス、そして心の病気、特に、うつ病の状態
  - (4) うつ病は、ありふれた病気。一生のうちでうつ病にかかる人は14人に1人とも。
  - (5) 問題は、人間の価値の源泉をどこで見出すかに尽きる。
  - (6) うつの時も、貧しい時も、病気の時も、年老いても「私には価値がある」と言えるか。

天地創造の記事は、人間の価値がどこから来ているかを教えている。

## I. 第4日目(創世記1:14~19)(第1日目と対応している)

1. 太陽、月、星が造られた。
  - (1) ここで造られた光る物が、3節の「光(シャカイナグローリー)」に取って代わる。
  - (2) 季節、日、年のために役立つ。
  - (3) 季節、日、年という概念が初めにあって、それを示すために光る物が造られた。
2. 天の光るものは、「しるし」としての役割を果たす。
  - (1) 航路を示すためのしるしとなる(ヨブ38:31~33)。
  - (2) 神の栄光を示すしるしとなる(詩篇19:1、ロマ1:20)。
  - (3) 神とイスラエルの契約が永遠に続くことのしるしとなる。(エレミヤ31:35~36)
3. 昼と夜、光とやみが区別された。
4. 神は見て、それを良しとされた。
5. 締めくくりのことば、「夕があり、朝があった」が出てくる。

## II. 第5日目(創世記1:20~23)(第2日目と対応している)

1. 海には海の生き物が、空には鳥が創造された。
  - (1) 「種類に従って」:必ずしも生物学的な種類ではない。
  - (2) 「種の壁」のことである。
2. 1:21に出てくる「海の巨獣」とは何か。
  - (1) ヘブル語では「タニニム(単数形タニン)」。旧約聖書に14回出てくる。
  - (2) 新改訳聖書の訳
    - ①「海の巨獣」
    - ②「蛇」(出エジプト7章)
    - ③「竜」

\*イザヤ27:1ではレビヤタンと同じ生き物。  
\*イザヤ51:9ではラハブと同じ生き物。

④「わに」(エゼ29:3)

(3)「タニニム」が出てくる理由は、バビロニア神話(異教の創造神話)を否定するため。

\*それらの神話では、天地は、神々と海の巨獣の戦いの結果誕生したとされる。

\*神は唯一至高のお方であり、すべての生き物を創造された方

例話：日本の創造神話(小林永濯・画、明治時代)

古事記と日本書紀には、「国生み」の神話が記されている。

伊邪那岐(イザナギ)・伊邪那美(イザナミ)という二柱の神は、別天つ神(ことあまつがみ)たちから、国生みの命令を受ける。それは、漂っていた大地を完成させよという命令であった。別天つ神たちは、天沼矛(あめのぬぼこ)を二神に与えた。

イザナギ・イザナミは、天浮橋(あめのうきはし)に立って、天沼矛(あめのぬぼこ)で、渾沌とした海をかき混ぜるのであるが、この時、矛から滴り落ちたものが、積もって島となった。この島を淤能基呂島(オノゴロ島、あるいはオノコロ島)という。これが、日本で最初に来た島だとされる。「こをろこをろ」とかき混ぜて引き上げたので、この名が付いたという説がある。イザナギ・イザナミの二神は、この島に降り立ち、次々に島を造っていくのである。創世記の創造物語と日本の創造神話は、全く内容が異なるものである。

3. 第5日には、命名はなくて、祝福という行為がある。

(1)「生めよ、ふえよ。海の水に満ちよ、また鳥は地にふえよ」

(2) 神がお語りになった最初の祝福のことば。

4. 神の評価と締めくくりのことばが続く。

### III. 第6日目前半(創世記1:24~25)(第3日目と対応している)

1. 動物の創造

(1) 人間と同じように、動物も地から形作られた(創2:19)。

(2) 人間と高等動物の体には、類似性がある。

2. 3種類の動物。

(1) 家畜

(2) はうもの。足がないか、足が短いもの。両生類、爬虫類。

(3) 野の獣。家畜にならない動物。

3. 種類に従って創造された。「種の壁」。

4. 神は見て、それを良しとされた。

#### IV. 第6日目後半(創世記1:26~31)(第3日目と対応している)

1. 6日目の創造は、第3日目と同じように2段階で行われる。

(1) 動物が創造され、最後に人間が創造される。

2. 新しい形の構文

(1) 「われわれに似るように、…人を造ろう」。それまでは、「○○あれ」。

(2) 神の創造の御業がクライマックスを迎えたことを示している。

(3) 「われわれ」という複数形の主語は、神が三位一体のお方であることを表している。

(4) 「人」はヘブル語で「アダム」。ここでは、アダムが普通名詞として使われている。

3. 「神のかたち」とはどのようなものか。

(1) 「かたち」はヘブル語で「ツェレム」。

(2) その意味は、偶像、彫像、似姿(幻で見る形)、などである。

(3) 「神のかたち」の外面的な性質。

①人間は言葉を使用する。

②顔に表情がある。

③恥を感じることができる(顔が赤くなる)。

④自然界を支配する能力がある。

(4) 「神のかたち」の内面的な性質。

①知性

②感情

③意志

④霊性(神を認識する能力)

(5) この段階での人間の状態

①罪を犯すことができた。

②罪を犯さないこともできた。

③墮落以降、罪を犯さないということができなくなる。

4. 創世記1：27

- (1) 「創造する (ヘブル語でバラ)」という動詞が3度も出てくる (クライマックス)。
- (2) 神は人を創造された。
- (3) ご自分のかたちとして創造された。
- (4) 男と女とに創造されました。男女は同じ日 (6日目) に創造された。

5. 創世記1：28～30

(1) エデン契約と呼ばれる契約

- ① 聖書の最初の契約。
- ② 2章に入ってから、さらに詳しい内容が示される。
- ③ 神がアダム (アダムは人類の代表) と結んだ契約である。
- ④ しかし、結果的にはアダムはこの契約を破る (ホセア6：7参照)。

(2) 「エデン契約」の条項

- ① 地に増え広がれという命令。「生めよ。ふえよ。地を満たせ」。
  - \* 男女の性的な関係を前提とした命令。
  - \* 性的な関係を墮落の結果と見る見方は、聖書的ではない。
- ② 地を管理せよという命令。「地を従えよ」。
  - \* 地とそこに住むものとの支配・管理する特権が与えられた。
  - \* 詩篇8：6～8
  - \* ヘブル2：5～9
  - \* この特権は、かつてサタンに与えられていたものである (エゼ28：11～19参照)。
- ③ 生物界を管理せよという命令。「海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ」。
  - \* アダムが動物に名前を付けるのは、管理権の行使。
- ④ 食物が与えられる。
  - \* この時点では、人類は菜食主義者である。
  - \* 肉食は、動物の死がなければあり得ないこと。
  - \* 自然界に死が入ってくるまでは、人類は菜食しか知らなかった。
  - \* 動物たちもまた、菜食によって命を維持した。

6. 創世記1：31

- (1) 「神はお造りになったすべてのものを見られた。見よ。それは非常に良かった」
  - ① 「非常に良かった」と書かれているのは、第6日だけ。
  - ② この日が、いかに特別な日であったかが分かる。
- (2) 締めくくりのことばは、「夕があり、朝があった。第六日」。

## 結論

1. 被造の世界は、「非常に良かった」という状態から始まっている。
2. それを悪くしたのは、私たちの罪である。
3. 人間性を正しく理解することによって、私たちの生きる方向性が確立する。
  - (1) 「良いもの」と「罪」の区別により、人間の生活は積極的で感謝に満ちたものとなる。
  - (2) 人間の価値は、生産性や、年齢や、優劣によって決まるものではない。
  - (3) 私たちは、不完全から完全へと日々前進している。

### ①Ⅱコリント3：18

「私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです」

②「姿を変える」は、「メタモフォウ」という動詞。

③キリストが変貌した時の動詞（マタイ17：2、マルコ9：2）

③死という繭にくるまれても、そこから見事な蝶に変貌する希望がある。